学校アドボカシー事業

にじトーク

「つどえ！こどもひみつ集会」

報告書

ごあいさつ

こんにちは。私たちは「にじいろグループ」です。

福岡県では特定非営利活動法人にじいろ CAP（キャップ）、佐賀県では一般社団法人さが子どもにやさしいまちづくりセンター、熊本県では任意団体くまもと子どもにやさしいまちづくりセンターを設立し、この 3 つをにじいろグループと称しています。

1995 年から CAP プログラムを活用し、文部科学省が提唱する「SOS の出し方ワークショップ」を、自治体と契約を結び、学校で実施しています。（※35 ページを参照ください。）

長年、学校で子どもたちに権利を伝え、子どもたちの SOS の声を聞き続けてきた私たちが、さらに「子どもアドボカシー」の文化を地域と連動して可能にするためにチャレンジをはじめました。

記念すべき 1 年目の実証について、ここに報告をします。皆さんのコミュニティにおいて実行していただけるようになることを目標に取り組んだ、長期的な実証の第一歩です。

もくじ

P2　本事業のはじまりと私たちの姿勢について

P3　コンセプトとルール

P5　子どもたちへの呼びかけ方

P9　学校アドボカシー　～ 昼休みの取り組み事例 ～

P16　話を聴くだけが「意見形成支援」じゃない

P25　学校の先生に仲間になってもらう

P28　進化しつづけるマニュアル

P35　CAP プログラムについて

本事業のはじまりと私たちの姿勢について

私たちは自治体との協働事業として小学校等の授業で CAP プログラムを活用した「SOS の出し方ワークショップ」を実施しています。その中で「自分の気持ちを人に共感してもらうこと」は人間の大切な権利であり「特に子どもは自分の気持ちをいろんな形で表していいんだよ」と伝えています。そして具体的に

NO：「イヤ」と言っていい　　GO：逃げていい　　TELL：相談しよう

を練習する形でワークショップを提供しています。
「SOS の出し方ワークショップ」は学校の授業枠 2 時限を使って行いますが、まず 60 分ほどを使って権利教育としての「意見形成支援」をします。そのあと一人ひとりが大人と話す練習「トークタイム」を実施します。気持ちを聞いてもらうことは子どもの大切な権利だと伝えた後に、改めて大人と話す体験は多くの子どもたちにとってとても新鮮らしく、楽しそうにいろいろなことを話してくれます。これはまさに「子どもアドボカシー活動」でした。
そして最後に子どもたちに聞かれます「次はいつ来るの？」と。子どもには「安心」「自信」「自由」の権利があり、そのために、必要な大人に聞いてもらう権利もあると伝えているのに「次は？！」という問いには答えられない。

そこで「SOS の出し方ワークショップ」に続くアドボカシー事業ができないかと考えました。「子どもの権利」に基づくポピュレーションアプローチ（※１）としてのアドボカシー事業の先行事例はほとんどない中、「アドボカシー事業」というより、「アドボカシー事業の実験」という試みです。

学校でアドボカシー事業を実施するという全てが新しい試みのなかで、３つのテーマを設定しました。

① 環境― どのような環境で子どもアドボカシーを実践するのか？
② 協働―学校や行政に理解・協力してもらうためにはどのようなアプローチと説明が必要か？
③ 告知―多様な子どもたちに来てもらうためにはどのようなアプローチと説明が必要か？

この３つのテーマについて、スタッフと外部のスーパーバイザーで議論を重ねました。

① 環境

20 年以上 CAP プログラムを使ってワークショップをしてきた経験から、閉ざされた部屋で個別に面談をする形はアドボカシーの練習には向かない！という確信がありました。また、ワークショップを共有し信頼関係を築いた子どもたちに実施する事業ですから、トークタイムに近い形で実施することが有効だろう、と仮説を立てました。

② 協働

個別の学校に行く前に「SOS の出し方ワークショップ」の依頼元である「家庭こども相談課」との合意が必要と考え､「学校アドボカシー事業」はマルトリートメント（※２）の早期発見・予防の効果になるはずだという説明をして協力を求めました。次に教育委員会に合意をとるために説明を行い、「学校アドボカシー事業」はさまざまな学校課題、いじめ・不登校・校内暴力・自傷行為等の早期発見や予防の効果があるとの説明をして理解を得ました。こうして行政・教育委員会の合意を得た上で、いくつかの学校に出かけ、具体的な事業説明を行い、協力を願いしました。その際 NPO 主催の事業ではあるが行政、特に教育委員会に合意を得ていることを伝え、合意を得た数校の中から幾つかの条件を加味して 5 校を選び、実施に関わる具体的な打ち合わせを行いました。会場が確保できるか？４・５・６年生の担任の理解・協力は得られるか？等を毎日忙しく学校行事に対応されている教頭先生に負担をかけないという視点で説明しました。
また、対象になる学年の担任（既に「SOS の出し方ワークショップ」を実施した学年）にも外部の NPO が大切な児童と接触することについて安全に十分配慮するとの説明を行いました。
子どものことを日常的に守っている機関や先生へのリスペクトとして、大人たちが抱く不安に対して十分な説明対応をするアプローチが有効なことを実感しました。

③ 告知

「弱い子どもが相談する」というイメージを減らす、という明確な目的を設定しました。そのために学校に貼るポスターと子どもたちに配るチラシのイメージを「つどえ！こどもひみつ集会『にじトーク』」としました。

こうしてスタートしたのが本事業です。私たちの１年間の取り組みと発見を、子どもたちへの「にじトーク」告知手法として採用したマンガを使って報告します。子どもたちに近い視点で最後までご覧いただけると幸いです。

※１：みんな（ポピュレーション）に働きかける（アプローチ）ことで、みんなのリスクを減らすこと。
※２：子どもにとって適切とは言いがたい、大人側の対応。

はじめに…

コンセプトは

やってみなきゃ分からない

子どもアドボカシーといえば
「カウンセリングっぽいもの」であり
「個室で１対１で行う」ことが
当たり前のように思われてきました。

私たちはすぐに「子どもたちに失望させたくない」
「失敗したらどうしよう」と恐れて
新しいことには躊躇し、今たまたま上手くいっていることを
そのまま続けてしまいがちです。
私たちは「本当にそれでいいのだろうか」と立ち止まり
「にじトーク」においては、さまざまな仮説を立てて
毎回、実験と検証と改善を積み重ねてきました。

私たちが目指したのは
実際にやってみて分かったことを、理論化していくこと。

当然、失敗もあれば、そこからの再挑戦もあり
うまくいったことばかりではありませんが
新しい発見があったことも事実です。
私たちは１年目の活動での
発見と工夫のしどころを皆さまにご報告し、
２年目にはさらなる発展を目指したいと考えています。

私たちのルール

やってみないと分からないとはいえ
次の２つのルールは明確にしていました。

① SOS 教育を行った学校でのみ実施！

② 子どもの自尊感情を大切にする！

① SOS 教育を行った学校でのみ実施！

子どもアドボカシーを子どもに浸透させていくには、
子どもが当たり前に知っておくべき「子どもの人権」教育を
事前にわかりやすく、実行しやすく、
当事者視点で伝えられていることが大事だから。

② 子どもの自尊感情を大切にする！

子どもは安心して自信を持って自由にのびのびと生きていたい自尊感情を持っています。
従順でかわいそうな表情で助けてもらおうと懸命に話しに来るわけではありません。
子どもには強さがあります。その強さに働きかけることが大事だから。

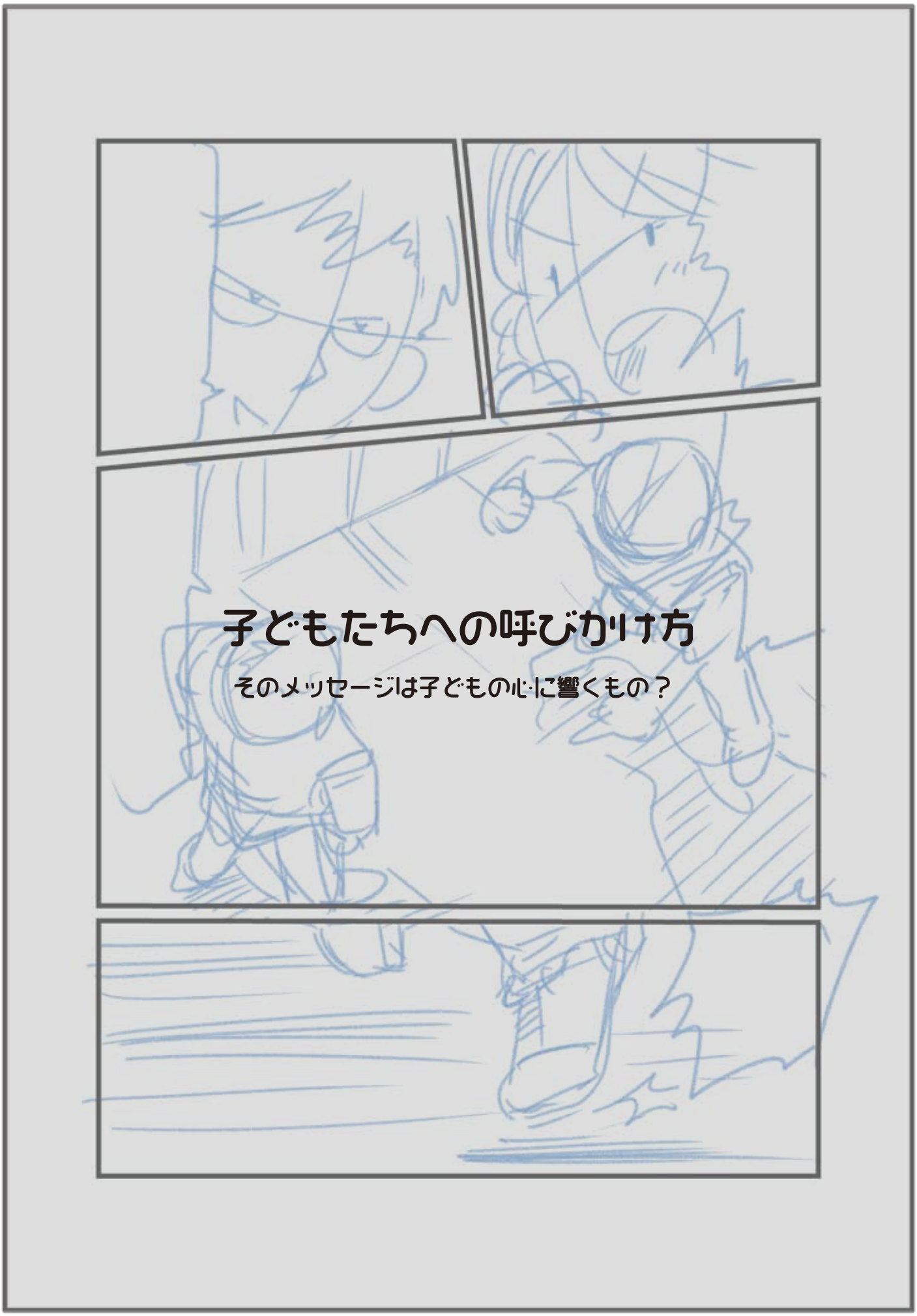
大切にしたこと

自分の意見を素直に語れる子が
たくさんいる一方で、
十分に意見を言えない子が一定数いることを
私たちは認識していました。
彼らが意見を表出・表明できるようにするには
どうしたらいいのか？
それを探るために、私たちは
観察を重視することにしました。
しゃべれない、しゃべりたくない子のニーズを
捉えたかったからです。

だってさ…

ホントの気持ちなんて

うまく話せないよね…



子どもたちへの呼びかけ方

そのメッセージは子どもの心に響くもの？

仮説

子どもは
理想の自分でありたい

かつてコロナ禍で行われた LINE 相談。
その男女比は 3：97（男：女）でした。
相談を苦手とする子どもたちの心にあるのは何か？
私たちは、そこに次のような仮説を立てました。

◉子どもだって「誇れる自分」でいたい
◉上から手を差し伸べられる「弱者」になるのはイヤ
◉早く大人のように自立したい

多くの男の子や、深刻な問題を抱えている子どもたちが
自尊感情を守りたいと思っているのであれば
弱さをさらけだす相談行為はハードルの高いものとなるでしょう。

この仮説をもとに
「しっかりとした自分でなければならない」「自分より困っている人がいるのだから…」と
考えてしまいがちな子どもたちの心にも響くようなポスターを考案してもらいました。

※考案されたポスターの一例

大人はつい、かわいらしい表現を求めてしまいがちですが
それは本当の子ども視点なのだろうか？と考え、決定したポスターとチラシが以下のものです。
悩みながらも、自らの意思で打開しようとする、どこか大人な子どもたちが主人公です。

実際に掲出したポスター

～私たちの発見～
ひみつ基地っぽさが大事

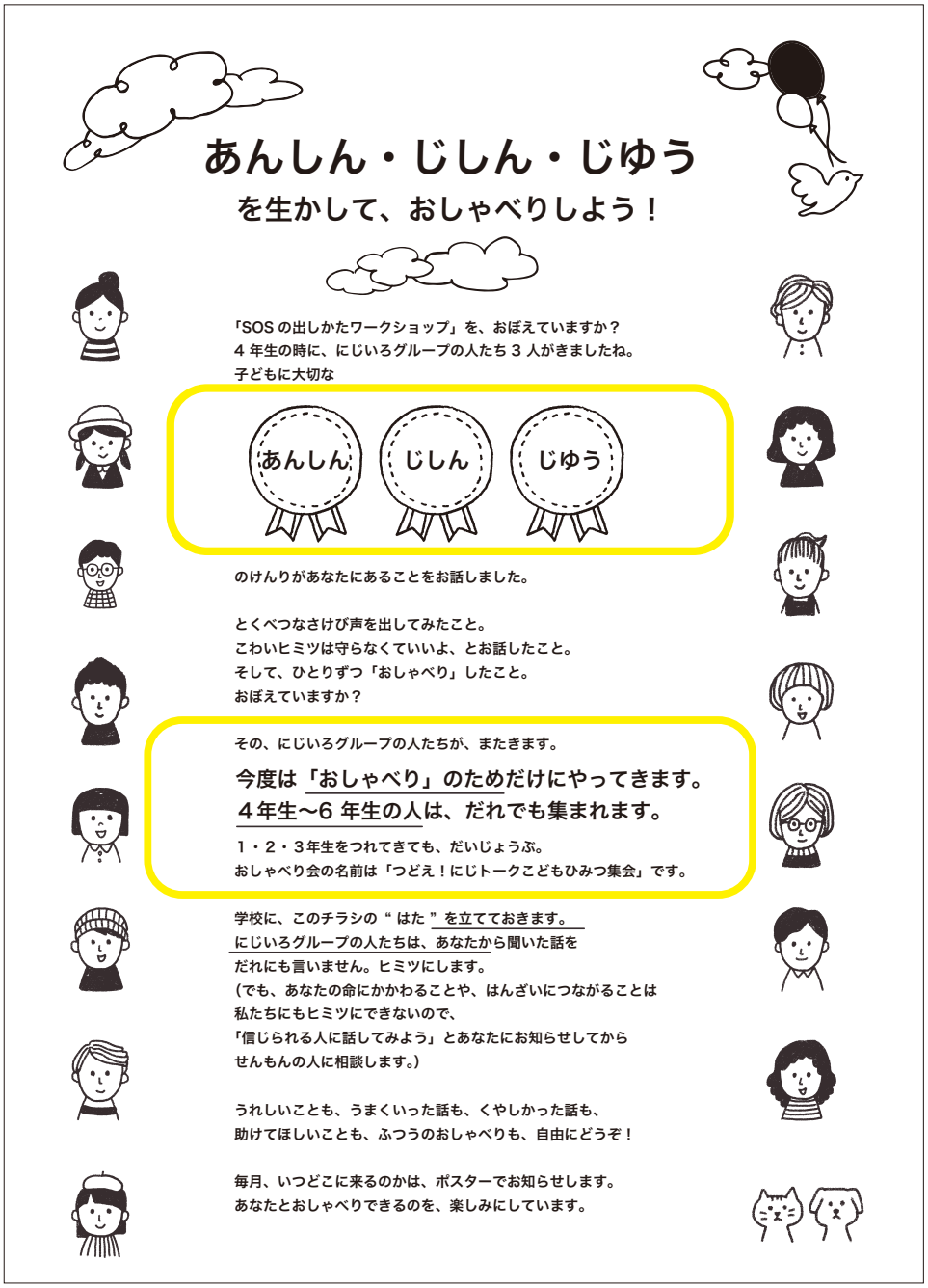
「にじトーク」への参加呼びかけには
上のようなポスターを活用し、各教室に掲示してもらいました。
「ひみつ集会」という言葉で心を躍らせ、
実際に来てみると「ひみつ基地」があり、安心できる。
そうした流れを意識した表現です。

「ひみつ基地には、キミを制限するものはなく
何を話しても、どんな表現をしてもいいんだよ」

そのように約束することが子どもたちにとっての「意見を言いやすい環境」になるのではないかと考えています。

より詳しい情報をお伝えするチラシは
裏面を、以下のように仕立てました。

配布したチラシの裏面（オモテ面はポスターと同じマンガ）



あんしん・じしん・じゆう
を生かして、おしゃべりしよう！

「SOS の出しかたワークショップ」を、おぼえていますか？
4 年生の時に、にじいろグループの人たち 3 人がきましたね。
子どもに大切な

あんしん　じしん　じゆう

のけんりがあなたにあることをお話しました。

とくべつなさけび声を出してみたこと。
こわいヒミツは守らなくていいよ、とお話したこと。
そして、ひとりずつ「おしゃべり」したこと。
おぼえていますか？

その、にじいろグループの人たちが、またきます。

今度は「おしゃべり」のためだけにやってきます。
４年生〜6 年生の人は、だれでも集まれます。

１・２・３年生をつれてきても、だいじょうぶ。
おしゃべり会の名前は「つどえ！にじトークこどもひみつ集会」です。

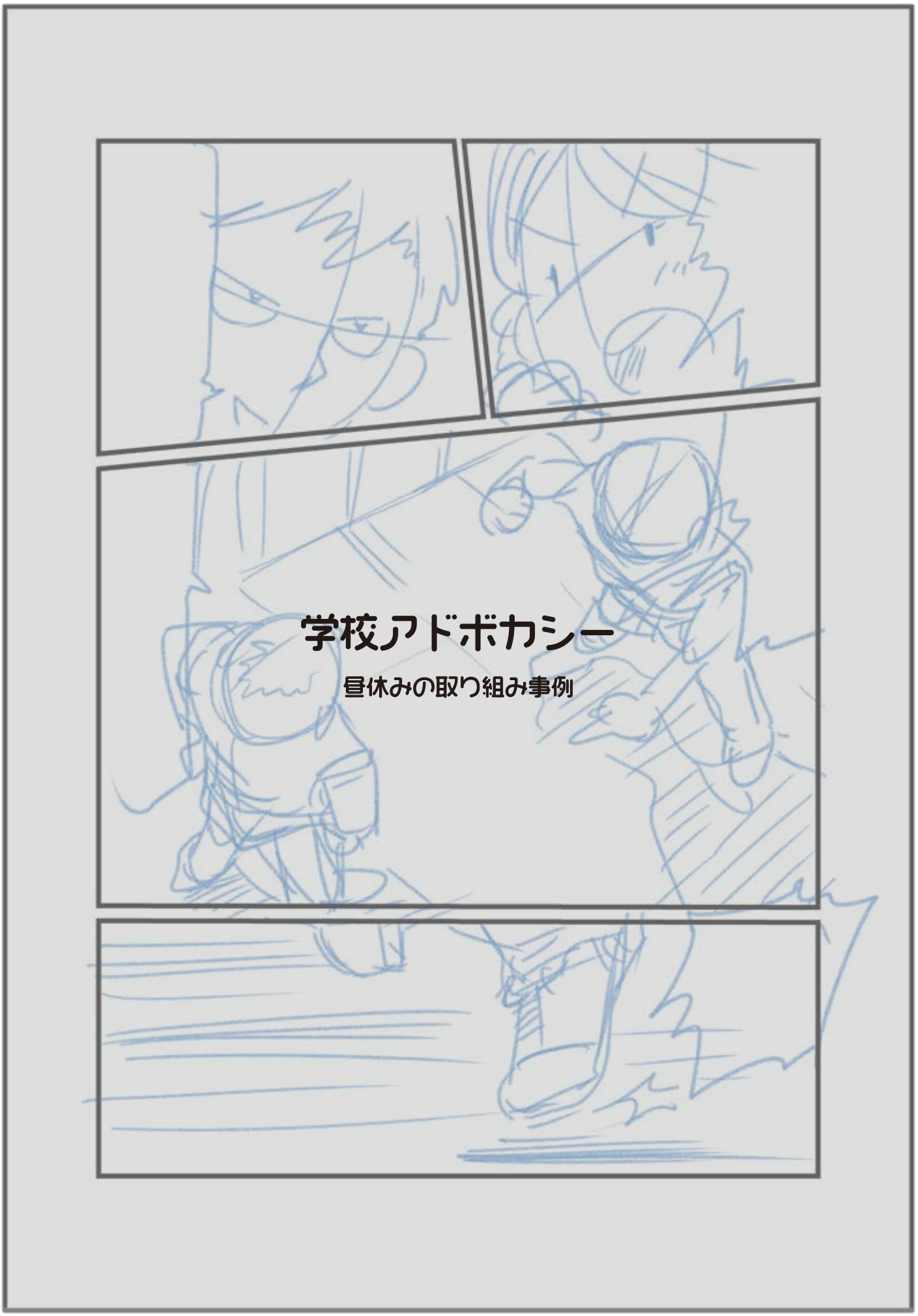
学校に、このチラシの“ はた ”を立てておきます。
にじいろグループの人たちは、あなたから聞いた話を
だれにも言いません。ヒミツにします。
（でも、あなたの命にかかわることや、はんざいにつながることは
私たちにもヒミツにできないので、
「信じられる人に話してみよう」とあなたにお知らせしてから
せんもんの人に相談します。）

うれしいことも、うまくいった話も、くやしかった話も、
助けてほしいことも、ふつうのおしゃべりも、自由にどうぞ！

毎月、いつどこに来るのかは、ポスターでお知らせします。
あなたとおしゃべりできるのを、楽しみにしています。

「SOS の出し方ワークショップ」で子どもたちが覚えた
「あんしん・じしん・じゆう」のフレーズを
目立つように入れています。
「にじいろの人たちが来るんだ！」
「いろんなことを話せるチャンス！」
と自然と思ってもらえるような工夫です。

当日は、右のような声も多くあがりました。



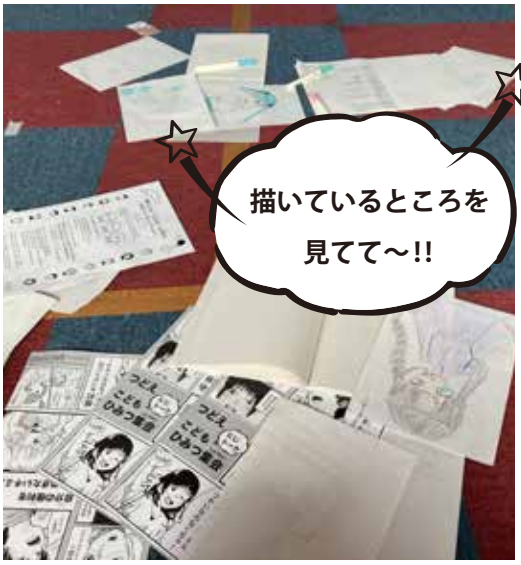
学校アドボカシー

昼休みの取り組み事例

【事例１】
A小学校

■ 対象者　　：４～６年生（約 310 人）
■ 参加人数
　1 回あたり平均：32.2 人
　最大参加人数　：51 人
　最少参加人数　：20 人

A 小学校でのアドボカシーは
子どもたちが思いっきり遊ぶところから
スタートしました。



子どもたちのようすを見ながら、いろんなゾーニングを試してみることに！

部屋のゾーニングは毎月変えていきました

10月 アドボケイトはトークタイムのように、四隅に座る。
テントを持っていく。

11月 子どもたちがダンボールで基地を作成。

12月 しっかりゾーニング。初めてコンシェルジュ（案内係）を置く。

1月 前回と位置を変えてゾーニング。
子どもがトークスペースを横切るなど、位置取りはイマイチ。

2月 トークスペースを部屋の四隅へ。アートスペースを奥にして
走り回れるスペースを十分に確保！

3月 2月と同じゾーニングに。
ひと遊びした後、トークスペースへ。

気分に合わせて、過ごす場所を選んで、移動して…

こんなに
自由に遊べるなんて
サイコー！

最後は、落ちついて話しにくる子どもたちも現れました。

せっかくだから
話して帰るね～

【事例２】
B小学校

■ 対象者　　：４～６年生（約 140 人）
■ 参加人数
　1 回あたり平均：16.7 人
　最大参加人数　：25 人
　最少参加人数　：12 人

音楽室を使った教室ひとつ分の
こぢんまりとした会場です。
最初は、ただなんとなく
ゾーン分けをしました。

【1 月以降のゾーニング】

待ち時間を楽しく過ごせる
アートスペース

ゾーニングによって、「もっとしゃべりたい」の
ニーズに応えられるように！

コンシェルジュが受付で歓迎

地域力があり
いろんな大人と
接する機会がある
B 小学校の子どもたち。
彼らに適した
ゾーニングを試みました

10月 アドボケイトはトークタイムのように、四隅に座る。
テントを持っていく。

11月 グループトークへ。

12月 ゾーニングをして、アートスペースとトークスペースを区分。

1月 ゾーニングにプラスして、コンシェルジュを配置。

2月 前月と同じスタイル。

3月 引きつづき同じスタイル。ぬいぐるみを被って、
練り歩いて広報。男子の参加が増えた。

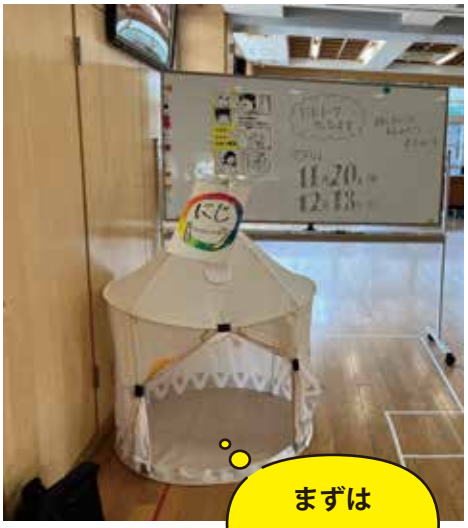
「にじトーク」のお知らせを聞いてから
ずっと待っていたという人も多かった B 小学校。
「聴いて！聴いて！」の思いに応えられるよう
スタッフは時計を見ながら、時間を配分。
子どもたちも、後ろに誰かが並んでいると
「次、いいよ！」「譲ってあげよう」と
自主的に交代するようになりました。

【事例３】
Ｃ小学校

■ 対象者　　：４～６年生（約 320 人）
■ 参加人数
　１回あたり平均：15.8 人
　最大参加人数　：36 人
　最少参加人数　：　４人

広々とした会場に
最初はポツーンと座るだけのところから
始まりました。

多目的ホールが会場



まずは
テントかな…

ある日、絵を描くコーナーを作ったら、めっちゃ大人気に！

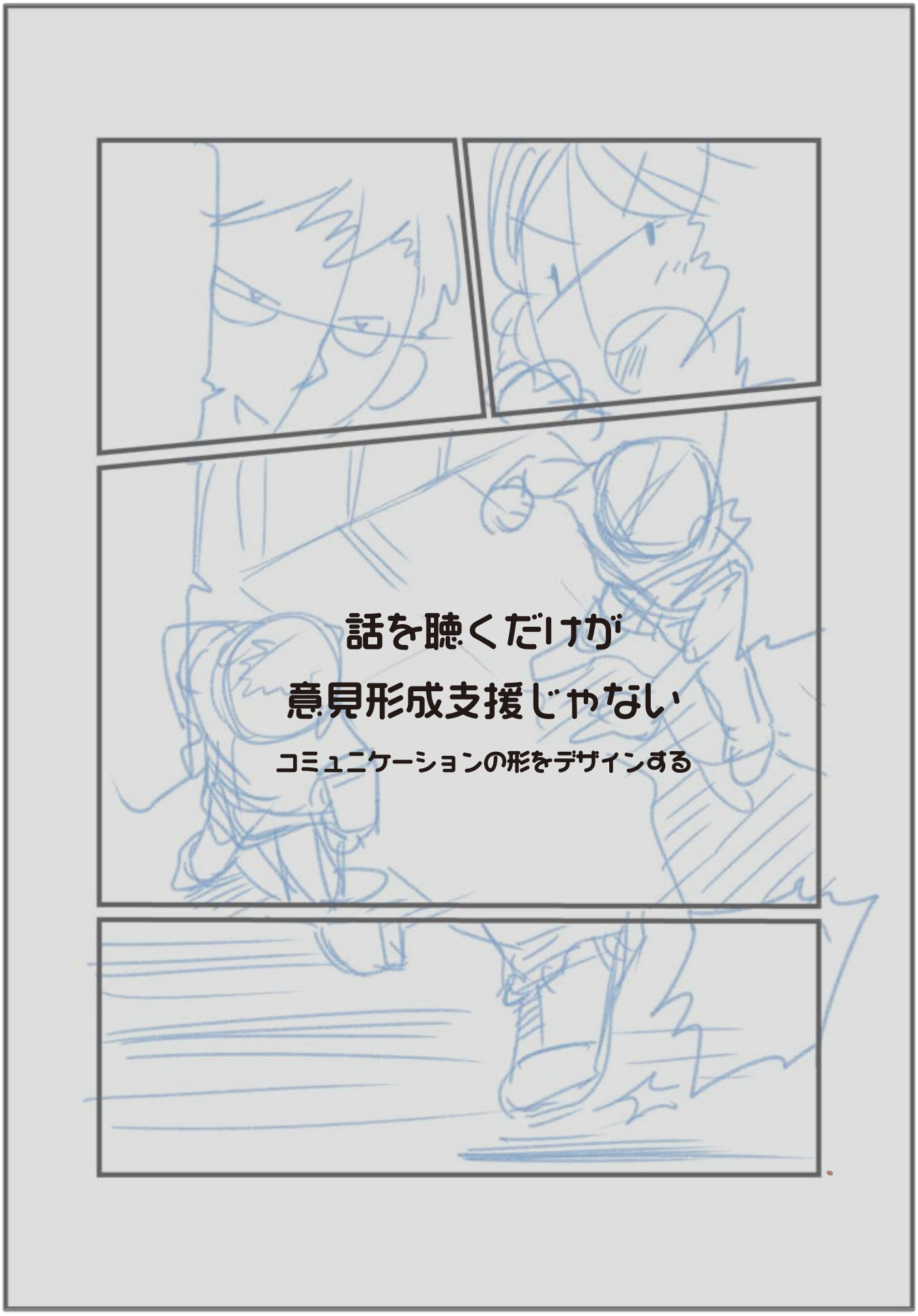
C 小学校では
男女の参加比率は半々。

男の子たちは
複数人でやって来て
それぞれに
話したいことを
しゃべっていきます。

ゾーニングの位置が
定まってくると
「話したい」「絵を描きたい」
「走り回りたい」が
どれも保障されるように
なっていきました。

絵を描きながら順番を待っています

なんと、校内放送が
子どもたちに届かず
4 人しか参加しないという
ハプニングが発生した日も！
でも、これが大切な気づきにつながり
次の学校での改善に活かせました。


話を聴くだけが
意見形成支援じゃない
コミュニケーションの形をデザインする

思いを言語化することは、誰にとっても容易なことではありません。それが子どもであれば、なおさら。
私たちは子どもたちと向き合いながら、どうすれば意見形成をサポートできるのかを探っていきました。

子どもたちの カラダは おしゃべり

A 小学校における、にじトークでの出来事。
教室２つ分の広さの多目的ホールが会場です。
その日は、学校レクリエーションのあとだったため、段ボールが部屋に山積みに。
私たちは、「まあ、いいか」と段ボールを部屋の隅に集めておきました。
するとどうでしょう。子どもたちは、その段ボールで汗だくになりながら
走り回り、飛び回り、それぞれ基地を作りはじめました。

A 小学校での出来事で、私たちはある欲求に駆り立てられました。
いきいきと遊び、満足したようすの子どもたち。何より安心して、それぞれの思いを表現している!!
この「混沌」とした表現も保障したい…でも、一体どうすれば!?

混沌の中にも調和がないと話せない

広〜い部屋に、ただ大人がポツンポツンと座っていても
子どもたちはどう動いたら良いのか分かりづらい。

世の中には、スーパーマーケット、ディーラー、家具屋など、
人に気持ちよく、自然に動いてもらうためのデザインが溢れています。
「そうだ！にじトークには、空間デザインが足りなかったんだ！」
ということで、さっそく空間デザインに取り組みました。

受付、アートスペース、トークスペースを明確に。

受付ではコンシェルジュが案内をします。

トークスペースは、秘密基地をイメージして、部屋の四隅を使ったり、
仕切りなどを使ったりすると多様なニーズの子どもがトークスペースに寄ってきます。

私たちは
訪問のたびに
配置を変え、
空間づくりを
試して
発見をしました。

〜私たちの発見〜

いい空間は「らしさ」の束縛から解放してくれる

トークスペース＋アートスペースにプラスして、自由に走り回れるゾーンがあると、
「聴いて！聴いて！」以外のフェーズの子どもたちがたくさんやってきます。
そして男子の参加率が高くなる。さらに回数を重ねると、女子も男子も関係なく
走り回り、人形をぶん回し、投げ飛ばし、そして話をしにくるのです。
大人が望む「子どもらしさ」「女の子らしさ」「男の子らしさ」から脱却していく
子どもたち。彼らは「学校でこんなに遊べるだなんて〜！！」と叫びながら、
ひとしきり遊んだあとはトークスペースへ移ります。

心の扉を開くカギは「ちょいコワ」

空間デザインを考えてゾーニングをすると
おのずと「受付」の道具、サインボード、マット、仕切り、
トーキングスティック※ 用の人形など
「子どもたちがもっと話しやすくなるようなアイテム選び」の
アイデアが次々浮かんできました。これも、さっそくゲットするぜ！！

※トーキングスティック：「これを手にしている人が話すことができる」という印となるもの。

人形の数が足りない!!
サメがどこにいっても人気すぎる！
大人は「ユニコーンとシロクマちゃんが
かわいいから人気になるかな」って
思っていたのに…なるほど、それでは…
ヘビとタコとサメ（2匹目）も投入だ!!

「かわいい！」と男女問わず大人気なのはヘビです。
すごい愛され方！ぶん回しても、殴っても許されるからかしら。
子どもたちは、ちょっとコワくて、
肌触りの良いものを好むみたいです。
思う存分やって満たされると、一息つきに話しに来られます。

なぜだろう…
新入りのヘビに
ホッとする…

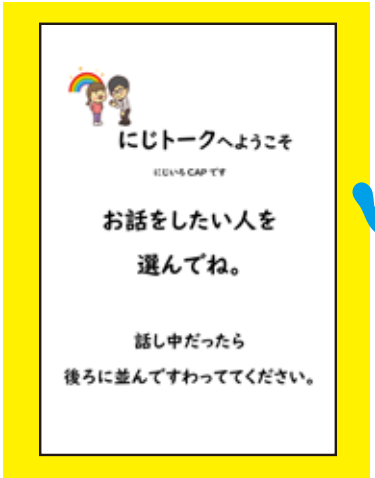
空間デザインに用いる道具たち

ゾーニングをしても、そもそも案内板がなければ
子どもたちに伝わらない!!と気づいた私たちは、サインボードを作成。
子どもたちの動線を観察しながら、検証を重ねて
「子どもたちを優しく誘導する」案内のあり方を考えていきました。

受付を分かりやすく！

① 入場したらシール を貼ってもらう

② 話したい相手が選べることを強調

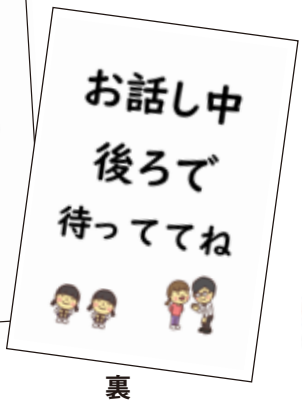


③「退出時 気持ちのシール台紙」とシールを用意

トークスペースに案内ボードを設置

いつ話しかけていいのか、どこで
待てばいいのかをボードでご案内！

表



裏

お話を聴く
スタッフの
ネームカードも用意！

案内ボードは
ミニイーゼルにのせて
お話しできる
タイミングで表裏を
ひっくり返します。

トークスペースの安心アイテムたち

トークスペースの空間デザイン

このふかふかで
リラックス〜♪

ラグマット

ヨガマット

仕切りは
高さ約 60cm が
ちょうど良いようです。
完全には隠さず、
だけど守られた空間が
つくれます。

仕切り

ひみつ基地の大切な居場所「テント」

人形がいっぱいだ！
なんか落ちつく〜

テント内にラグマットと人形を置くことで
「安心して一息つけるスペース」へ。

当初、ゆっくり１対１で話せる空間のシンボルとして購入したテント。しかし、さまざまなニーズやテンションの子どもが来る「にじトーク」では、子どもの気持ちを整える役割よりも、有り余るエネルギーの捌け口となり、破壊されました（笑）。

破壊された初代テント

テントは消耗品として捉えるべきかとも考えましたが、それぞれの子どものニーズやテンションを数段階に分けて、その心理と動線を考慮してゾーニングを行ったところ、子どもたちは落ち着き、テントが壊されることもなくなりました。

スタッフは
いつでも見渡せる位置に。
安全管理は怠りません。

絵の道具は会話を引き出すツール

絵を描く道具も、厚手の上質なスケッチブック（大・小）と、
クーピー、クレパス、水性ペン、鉛筆を用意。丈夫で上質な文房具を吟味しました。

「俺は絵が下手だからもっと小さい紙でいい。鉛筆でいい」
そんな気持ちを教えてくれた子も。

スタッフが「たくさん使ってもらいたくて用意したから、じゃんじゃん使って。
ペンも紙もいっぱいストックあるからどうぞ！使ってください！」と
声をかけると、「それなら」と用意した画用紙を思う存分使ってくれました。

「これ使ってもいいの？」「壊しちゃうかもよ」と遠慮する子どもたちに、「どうぞ！ご自由にお使いください！」と言って回るのも、大事な役目。

思いのままに
のびのび使える場を
約束する

禁止のない
世界なら
話しやすい

「～してはダメ」と言わないことが「にじトーク」の唯一のルールです。

◉子どもに対してはもちろん、スタッフ同士も同様です。
◉子ども同士が揉めそうな時も、揉めてしまった時も同様です。
◉もし揉めそうな時には、困っている側の子どもに聞きます。
例「何かお困りですか？」「イヤだと言っていいですよ。
私がお手伝いしたほうがいいですか？」等
◉常に「では、どうしましょうか」と折り合い可能な状況を対話で探します。
◉にじトーク利用者が安全に過ごし、安心でき、
且ついろいろな表現を可能するために何ができそうか、
どんな工夫ができるかを常に前向きに考えます。

「禁止」のない世界をつくるために、安全面には細心の注意を払っています。

◉ ハサミや刃物は置かない。
◉ 道具は、振り回してもケガしないモノ、壊していいものを用意。
◉ 常に、部屋全体を見回して安全確認。
◉ ケガにつながるような事態を予測したら、直ちにストップをします。
どんな時も「だめ」は使用しません。声のかけ方は
「ストップ！それは止めてね。…ありがとう！」

「学校には、子どもの安全を守る責任がある」ことも同時に意識しています。

子どもたちは「今」を生きている

ある日、子どもが４人しか集まらないという事態が勃発！
校内放送が、給食の片付けで騒がしくなったタイミングと重なったようで
窓口担当の先生によれば「聞こえていなかったのかも」とのこと。
ふだん私たちは、にじトーク会場で「次は、〇月〇日だよ～」と
ホワイトボードに書いたり、アナウンスをしたりしていますが、
それを子どもたちが手帳に書きとめるなんてことはあり得ません。
子どもは大人のように、ずっと先のスケジュールを踏まえながら
生活してなどいないことに改めて気づかされた出来事でした。

ならば、改善あるのみ！

次に訪問した学校では

校内放送
＋
お知らせまわり

人形たちも宣伝活動に参加！
子どもたちから「サメだ！」「タコだ！」という声が上がります。

こんな感じで道具を持って廊下を廻りました。

給食を食べ始めた時間が、ねらい目！だって、静かになるから。

それまで高学年の男子が
ほとんど立ち寄らなかった学校では
この「お知らせまわり」以降、
５年生男子が７～８人ほど
定期的にのぞきに来て
廊下で話をしてくれるようになりました。

別の学校でも同じように行うと
５年生男子が３人ほどやってきて
テントで遊んだ後、サメとヘビを持って
トークスペースで話して帰っていきました。

学校の先生に
仲間に
なってもらう

大前提

先生たちは子どもたちの安全を守りたい

学校は、教育の場であるとともに
子どもたちの安全・安心を守る場でもあります。
先生たちは、そうした責任を胸に児童みんなを我が子のように大切に思っています。
プロジェクトを推進するうえで決して軽んじてはいけないのが
この「先生たちの思い」です。

◉私たちは自分の正義を振りかざさない

◉「先生方は“何を目的とし、何を行うのか”を理解したいだけなのだ」と知る

◉先生の自尊感情も大切にする

【校長先生】

学校の最高責任者である校長先生。校内の活動については、それが子どもたちにとって安全・安心なものか、法令に違反していないか、教職員に過剰な労働を課すものではないかなどを考えて承諾します。行政が把握していない活動に OK を出すのは難しいのが事実。私たちは教育委員会の了承をとってから交渉をしています。

【教頭先生・学年主任】

学校運営の責任者として、その務めを果たさなければならない先生たち。
次のような情報を予め伝えておくことは最低限のマナーです。

◉何人で訪問するのか　◉子どもたちへの案内方法
◉事前準備について　◉所要時間・終了時間　など

【担任】

子どもたちの一番近くにいて、最も「親心」が強い先生たち。
「誰が来るの？」は、とても気になります。
日頃から「仲間」としての関係を築き受け入れてもらう環境を
私たち自らが整えていかなければなりません。

学校や施設で活動するには、いくつか押さえておきたいポイントがあります。
私たちは、長い年月「SOS の出し方ワークショップ」を通して
先生との信頼関係を築いてきた経緯があります。
そのうえで今回のプロジェクトでも、先生方との良好な
コミュニケーションを心がけ、協働で取り組む姿勢を大切にしました。

私たちは「おじゃましている」

まず、私たちは「おじゃまさせてもらっている」というスタンスで
学校に入っています。先生はいつだって
「子どもたちのために、より良い教育を」と願っているもの。
そうした先生方と思いを共にし、力を合わせて進めていくのが、
にじいろスタイルです。

「練習」というキーワード

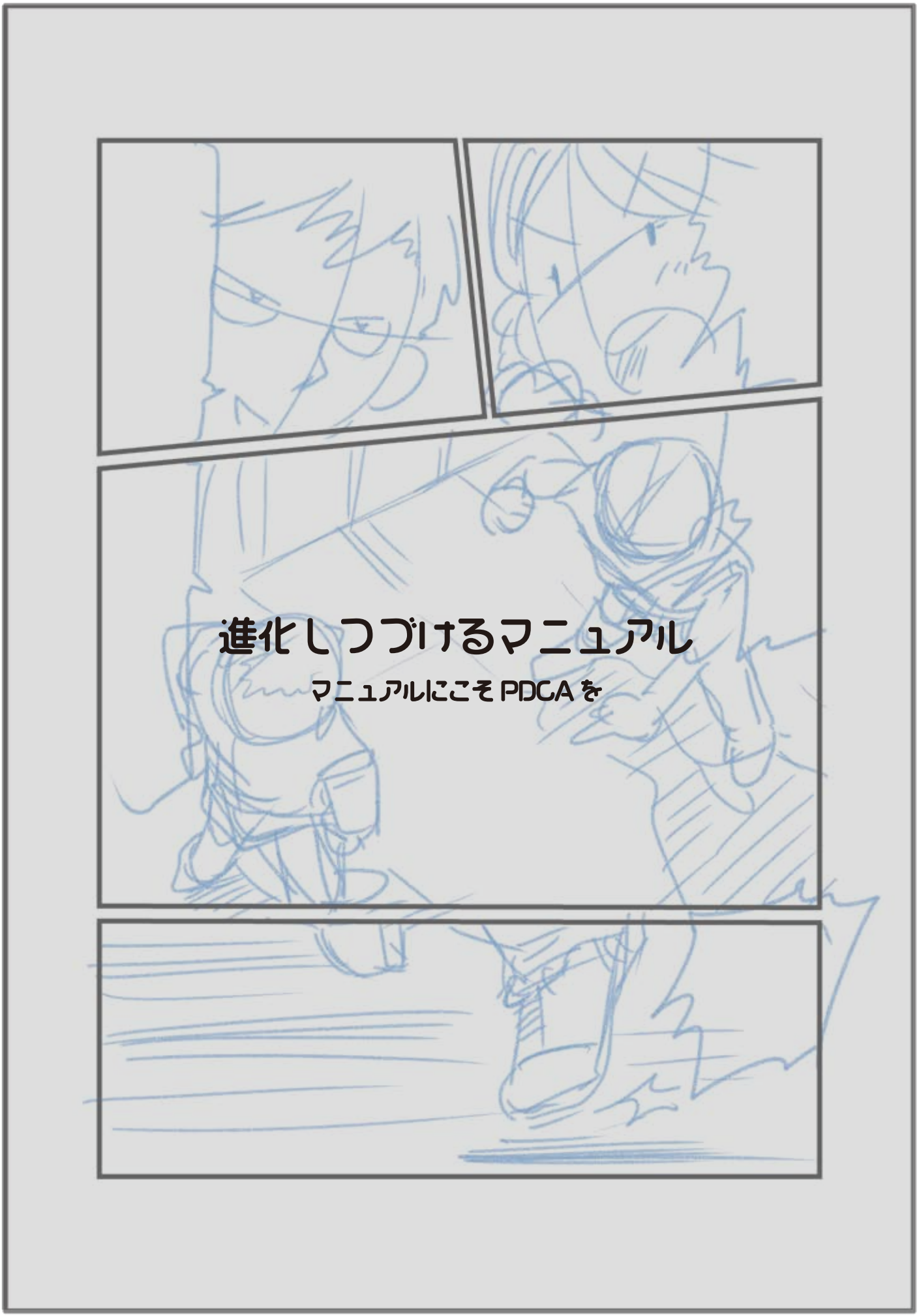
このプログラムについて、私たちは先生方に
「子どもたちが、いざというときに SOS の声をあげられるよう、練習したい」
と伝えました。
「練習」というキーワードは、学校でも施設でも受け入れられやすいようで
「それなら、どうぞ」と言っていただけます。
一方で「私たちはプロですから、先生方に代わって子どもたちの声を
聞いてきますよ！」と偉そうに言おうものなら、確実に煙たがられます。

先生と笑顔で語り合える関係づくり

私たちは、学校の先生方が安心できるエビデンスを持っており
教職員ワークショップ、子どもワークショップを通して、
日頃から先生にロールモデルを見せています。
「あっ！こんな話し方をすればよかったんだ！」
「この子とは、こう関わればいいのか」と
先生にとって良いヒントとなる情報も提供できるよう努めています。

小さな心配もなくしていく

実は、今回の「ひみつ集会」というタイトルに対して
一部の先生方からは軽い拒否反応がありました。
隠れて良くないことをするのでは…と心配されたのです。
そのため私たちは、プログラムの詳細について丁寧に説明し、
先生が会場にお越しになることにもウェルカムな気持ちを伝えました。
ちなみに、先生方は「子どもたちが話したことは伝えてくれるの？」と、
聞き出し役として私たちに期待していたところもあったようです。


進化しつづけるマニュアル
マニュアルにこそPDCAを

学校アドボカシー 運用マニュアル〔昼休み実施例〕

たくさんのトライを重ねて得られた発見は、マニュアルにまとめていきます。
さらに新しい気づきがあれば、そのたびに更新されていくマニュアルではあるのですが
この１年間の活動で、おおまかなカタチになってきているのは確かです。
本章では、現段階の「にじトーク」マニュアルをご紹介いたします。

準備物

受付用 備品	アートスペース用 備品	トーク用 備品
◆サインボード ・「にじトークへようこそ」 ・「ご自由にお使いください」 ◆入場時 学年シール、台紙 ◆退出時 気もちのシール、台紙 ◆シール ◆にじトーク チラシ ◆BGM 用スピーカー ◆BGM 音源 ◆養生テープ ◆マグネット ◆にじトーク看板 ×４セット	◆サクラクレパス ×２セット ◆クーピー　×　２セット ◆ラッションペン 12 色 ×２セット ◆上質なスケッチブック （天のり製本タイプ） ◆鉛筆３～5 本 ×２セット ◆消しゴム　　２セット	◆ヨガマット ◆ラグマット ◆仕切り （断熱シート 60cm）×３セット ◆サインボード ◆アドボケイト名前ボード ◆「お話したい人はどうぞ」ボード ◆番号札（１～３）×３セット ◆ぬいぐるみ６つ ・トーク用 （ユニコーン・シロクマ・サメ） ・テント用 （ヘビ・タコ・サメ） ◆ポップアップテント１セット

セッティング前

① 30 分前に到着
② 事務室もしくは窓口の先生、管理職等の担当者に声をかける
③ 担当者に校内放送を依頼する
④ 会場の鍵を借りて会場に行く
⑤ 設営班は準備に取り掛かる
⑥ 当日告知班は、４～6 年生の教室の前を通って声をかけながら会場へ向かう

準備物を持って登校

担当者へ校内放送のお願いをする

大量の荷物を持って会場へ移動

設営

① 次の 3 つのスペースをセッティング
- ◉ 受付スペース
  （入場時のシールを貼る台紙、退出時 気もちのシールを貼る台紙、シール、チラシ）
- ◉ アートスペース（クレパス、クーピー、ラッションペン、鉛筆、スケッチブック 2 種類）
- ◉ トークスペース（サインボード、名前ボード、ヨガマット、ラグ、しきり）

② 会場付近の廊下や入口にポスターなどを置く

③「にじトーク」の目印を作っていく（養生テープやマグネットを用いて壁に傷をつけない）

④ 次回の日程を会場内に示す

⑤ 受付・ホワイトボード・サインボード等 → 子どもの目線の高さや視野を考える

受付スペース

アートスペース

トークスペース

会場へ誘導する入口付近の掲示物

「SOS の出し方ワークショップ」で伝えた
「あんしん・じしん・じゆう」の権利ボードも掲示する

トークスペースには、待つ子どもたちの
ための椅子もセッティング

会場全体のようす

当日告知も重要！ 特に４・５・６年生の教室の前をあえて通り「にじトーク」がまもなく開催されることを視覚情報で訴えていきます。

にじトーク開始

アドボケイトの役割

◉ 基本は話すスペースで座って待っておく
◉ 子どもの様子に合わせて声をかけたり、促したりする

トークスペースのようす。一人で話したい子もいれば、２～３人くらいで話したい子もいます。

コンシェルジュの役割

◉ 子どもが入口付近で迷っていたら声をかけて促す
◉ 子どもを案内する
◉ 本日の場所（話せる相手、場所、絵を描くスペース）などを説明する
◉ 子どもの希望を伺う（「今日は、どこから始めますか？」など）
◉ 入場者数を把握するためのシールを貼ってもらう。帰りに貼るシールも説明をする

入場時のシールと台紙

「どこから参加しよう？」と考える子どもたち

にじトーク終了後

◉ 会場内で当日の記録を行い「内容記録ファイル」に綴る
◉入場時シール台紙の隅に日時と学校名を記録する
◉退出時 気もちシールの台紙の隅に日時と学校名を記録する
◉ 担当窓口か管理職に声をかけて帰る

学校アドボカシー に必要な「アドボケイト」と「コンシェルジュ」

私たちが目指していること

地域のみんなを
アドボケイトに

学校アドボカシープログラムは、最終的には
教育や福祉とは違う分野、たとえば地域で暮らす
一般の人々にも協力してもらえることを目指しています。

下記にある「アドボケイト対応マニュアル」には
みんなが使えそうな子どもへの声掛けの
参考例を並べています。

アドボケイト対応マニュアル

1）子どもが話すスペースに来たら

「いらっしゃ～い」「来てくれてありがとう」
「ここは何でも話していいところです。あなたの話をいろいろ聞かせてね」などの
声かけをして、和やかな雰囲気を演出します。

2）犬のように黙って最後まで嬉しそうに聴く

あなたの話が聴けて嬉しい！と伝わるように「うんうん」とうなずきます。

3）子どもの話に区切りがついたら

改めてその子が、何をアドボケイトにしてほしいのかを尋ねます。
「話を聴かせてくれてありがとう。今日、私にしてほしいことはなぁに？」
①このまま話を聞こうか？　②何かアドバイスがほしい？　③なんだろう？教えて♪

4）子どもの希望に応じて対応

◆耳を傾ける　「その時あなたはどう思ったの？」「いつもはどうしているの？」「本当はどうしたかった？」
◆感謝を伝える　「教えてくれてありがとう」「聴かせてくれてありがとう」
◆肯定する　「そっか～そう思っているんだね」「なるほどぉ」「確かに」「うんうん」
「話すっていう権利を使ってくれてありがとう」
「あなたには、いつも安心・自信・自由でいる権利があるんだよ。権利って“してもいいこと”だったよね。
だからここに来てくれたことが、私たちはとてもうれしいの。本当にありがとう！」

後ろに何人か並んできたら
「昼休みは何時まで？
後ろの人と交代してもいい？」と
提案します。

私たちが目指していること

コンシェルジュは「接客」に徹する

子どもにとって一番うれしいのは
だまって話を聴いてもらうこと。
でも、教育や福祉を専門とする人は
聞きだそうとしたり、アセスメントしたり、
解決型でものごとを考えてしまうクセが
ついつい出ちゃうだろうと思います。

私たちが、この１年間で気づいたのは、
ホテルマンのように「接客」に徹するほうがいいのかもしれない、ということでした。

【にじトークにおけるコンシェルジュの役割】

子どもに安心して参加してもらうには、場の演出がとても大切。中でも、子どもが最初に顔を合わせる大人の第一印象はとても重要です。

- ◉ レストランのスタッフやホテルマンのように振る舞います。
- ◉ 基本の心得は「接客」です。
- ◉ コンシェルジュはユーモアや親しみやすさを持ち、ひとりひとりの子どもが権利を持つ主体者として気もちよく過ごせるよう全体をコーディネートします。

コンシェルジュ
対応マニュアル

受付での声かけとアクション

①「いらっしゃいませ～」「ようこそにじトークへ」「どうぞ～！」と呼び込みの声かけをします。
※「どんな所かな？」「入ってもいいのかな？」という子どもたちの不安を払拭するために、
明るめに声をかけます。

②人数を把握するために「シールを貼ってください」と声をかけ、
当該学年の欄にシールを貼ってもらうよう促します。（シールは１人１枚のみ）

③にじトークの場の説明をします（必要があれば、そのスペースまでご案内）
（例）「説明しますね。ここは“にじトーク”といって、何でも話していい場所です。
楽しかったこと、イヤだったこと、自慢話、なんでも聞かせてください。
今日は　のりちゃん、こむぎちゃん、きりんちゃんがいまーす！」
「あんしん　じしん　じゆう」って覚えているかな？終わった後におしゃべりしたよね。
私たち、また皆さんとお話ししたい！と思って来ました。よろしくね。」
「お話ししたい人はこちら、あちらは絵を描く所です。ご自由に過ごしてください！」
「では、行ってらっしゃ～い！」　など

④帰る時の説明をする
「帰る時はここにシールを貼って帰ってね」（退出時 気もちシール台紙に貼ってもらう）

にじトークの最中

◉ 常に部屋全体を見渡し、観察しながら困っていそうな子どもには声をかけ、希望や要望がないかを尋ねます。
「何かしたいことある？」「お話したい？」「こっちもいいよ」　など

◉トークスペースを見ている子どもがいたら「お話し希望だったら、ここで待っててください。
私に声をかけてもらっても OK です。私がスタッフに声をかけて調整するので」と声をかける。

帰りのおもてなし

「今日はありがとう～」「シール貼って帰ってね～」「次は〇月〇日だよ～」「また来てね～」など
声をかけながら、気もちのシールを貼ってもらい、送り出します。
※シールを貼る個数制限はありません。たくさん貼りたい人、１つ貼る人さまざまです。
※こちら側がルールを作らずに、思う存分シールでも自分の今の気もちを表現できることを保障します。

CAP
プログラム
について

1995 年に始まった CAP プログラム

この報告書にも何度か登場している「SOS の出し方ワークショップ」。
そのベースとなっているのが CAP プログラムです。
1995 年に始まり、アドボカシーの基礎にもなっている
このプログラムの概要をご紹介いたします。

CAP プログラムとは

Child（子ども） ＋ **A**ssault（暴力） ＋ **P**revention（予防） ＝ **子どもへの暴力防止**

誰かにイヤなことや怖いことをされたとき、「何ができるか」を子どもと一緒に考える体験型学習形式です。

３歳から高校生までの
発達に合わせたバージョンがあり、
いずれもロールプレイで問題提起をして
子どもたちと考えながら進める
ワークショップとなっています。

- 就学前バージョン
- 小学校 1～2年生バージョン
- 小学校 3～4年生バージョン
- 小学校 5～6年生バージョン
- 中高生 さくらんぼプログラム

教職員ワークショップ

地域保護者等ワークショップ

おとなたちと
目的や手法について
合意していく

心理的安全性のある
時間にするための
環境づくりを
先生と打ち合わせ

担任教諭と事前打ち合わせ

SOS の出し方ワークショップ

子どもに特に大切な権利「安心・自信・自由」

1）子ども同士の関係
権利を奪われるロールプレイ ➡ ディスカッション
➡ 権利を守ることができるロールプレイ

2）知らないおとなとの関係
権利を奪われるロールプレイ ➡ ディスカッション
➡ 権利を守ることができるロールプレイ

3）知っているおとなとの関係
権利を奪われるロールプレイ ➡ ディスカッション
➡ 権利を守ることができるロールプレイ

4）信頼できるおとなに相談するロールプレイ

5）まとめ

自分を表現するための権利や考え方を知ることで
「意見形成支援」になる

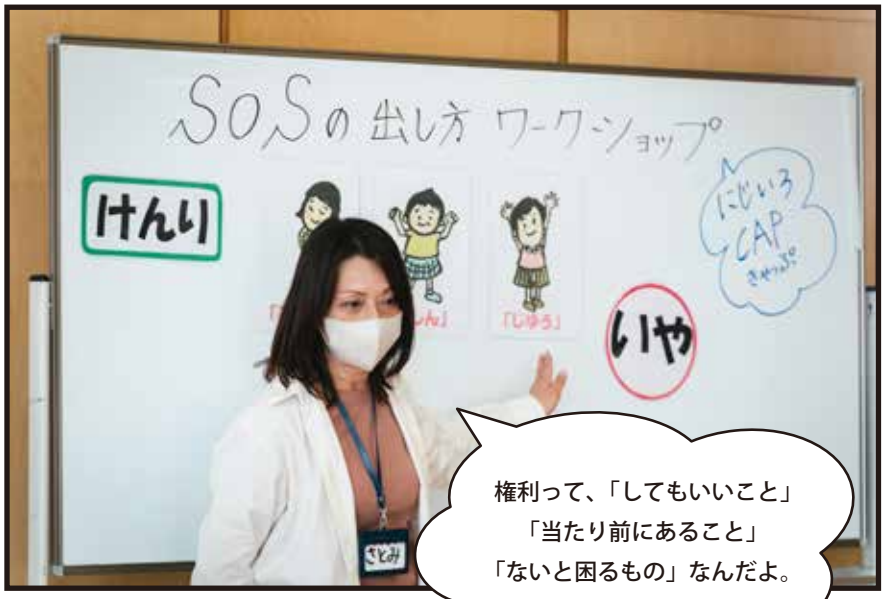
自分を表現するお手伝い
誰かに言いたいことを整理するお手伝い

子どもが大人と話す練習タイム（※アドボカシーにあたる部分）

担任教諭と振り返り

ある日のCAPプログラムのようす

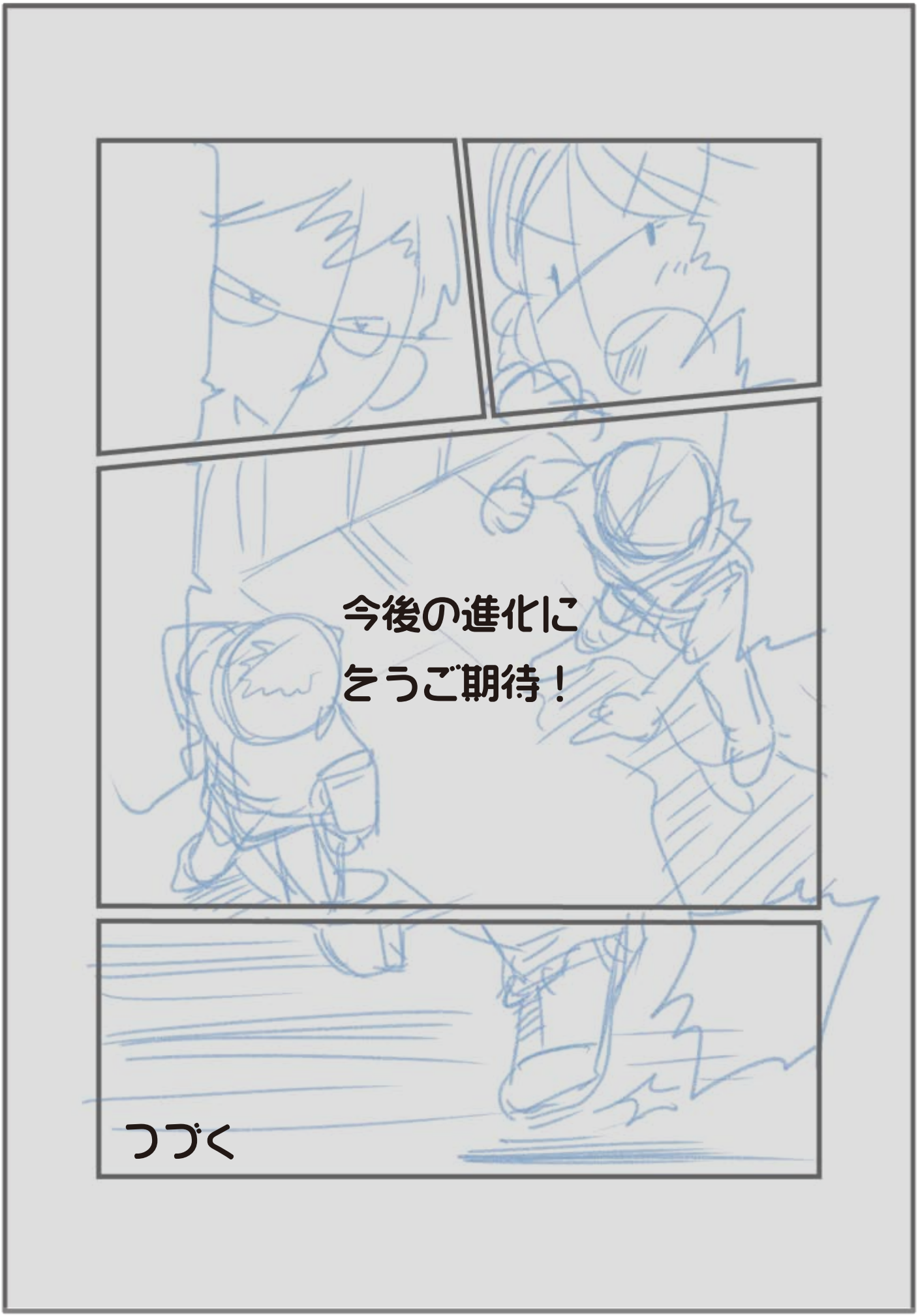
子どもには、いつでも
「安心」「自信」「自由」の権利があることを伝えます。



権利って、「してもいいこと」
「当たり前にあること」
「ないと困るもの」なんだよ。

友だちと一緒なら
「いや」と言いやすくなる。
そんなピアサポートの
練習の一幕。

権利を奪われそうになっても
子どもだからできることがある！と
勇気づけます。


今後の進化に
乞うご期待！
つづく

2024 年も、挑戦は続く！

2024 年度も、日本財団の助成で対象地区を拡大！
2023 年度に実施した久留米市だけでなく
にじいろグループが「SOS の出し方ワークショップ」を
続けている佐賀市・福岡市・小郡市にも進出します。
そして、より多様な背景を持つ学校での実施実験を行い
声を出しにくい子どもたちの声を集めていきます。

Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION